

2 『法華經』にみる医療

杉田暉道

『法華經』は紀元前後に成立した大乘經典である。そしてこの經典は出家僧は勿論のこと、在家信者もすべて久遠本仏の救済活動によつて悟ることができると説いた。すなわちすべての人が救われるという人間平等の精神が貫かれている。したがつて法華經を信仰し、これを広めればその目的を達成できるとした（二乗仏教の思想）。多くの大乗仏教典の中で『法華經』がもっとも注目されているのは、実にこの点にある。

本經の医療については、「普賢菩薩勸發品」に病氣の仏罰觀を述べている。すなわち、最高の經典である『法華經』を護持する僧、書写をする者、説誦する者、またはこの教えを説く教師たちに、不快な言葉を浴びせる者は、健康障害を起こし、種々な皮膚病にかかることを知らぬ

ばならぬ。と説いている。

「譬喩品」では、本經を信じない者から生まれた者は、不具、不治の病氣、眼の病氣となり、暗愚となる。また病氣になったとき、良い医者にかかつて有効な薬を服用しても反つて病氣は進行して治らない。さらに盲人となり、聾啞者となり、白啞となる。また種々の病氣が彼の衣服となり、身体には幾千億の傷が生ずる。また濕疹や疥癬にかかり、白くも（円形脱毛症）や白なまず（尋常性白斑）やらい病を患つて悪臭を放つ。彼は自分の肉体に実我があるという誤つた見解に固執し、彼の怒りは強くなる。彼の淫欲は激しく、彼はいつも畜生との性交を樂しむ。という。

「藥草喩品」では人間の煩惱を風性のもの、胆汁性のもの、粘液性のものおよびこれらの合併したものにたとえ、煩惱を克服する方法を四種の藥草（浸透剤、解熱剤、解毒剤、鎮痛剤）で治療する方法にたとえている。すなわち、生まれつきの盲人は、この世はすべて同色で太陽も月もないと思う。しかし普通の健康な人はこの世には種々の色があり、太陽も月もあると盲人にさとすが、彼はそれ

を信じない。そこへ立派な医師が来て盲人を見て、これは前世の悪業によつてこの病氣になつたのである。一般には病氣には、風病性、胆汁性、粘液性、これらの三種の病氣の合併したものの四種類に分けられ、治療法は異なる。しかし盲人の盲目はこれらの治療法では治らぬ。ヒマラヤ山にある浸透剤、解熱剤、解毒剤、鎮痛剤の四種類の薬草で治ると考え、ヒマラヤ山に登つて四種類の薬草を採取し、彼の眼を治してやつた。視力を回復した盲人は「かつて自分は注意されたのに、人の言葉を信用しなかつた。今は何でも見ることができると。したがつて自分より勝れた者はいないのだ。」とうそぶいた。すると仙人達は、「お前はただ視力が回復したに過ぎないのにとつてうしてそんなにうぬぼれるのか。」「お前は暗黒を光明と思ひ、また光明を暗黒と思つていたことを悟るべきだ。」と言つた。そこでこの男は仙人達に「どうしたら理智が得られるのか。」と尋ねた。仙人達は人里離れた所で一心に修行することを教えたので、それを実践して五種の神通力を得た。

ここで生まれつきの盲人とは六種の運命（地獄、餓鬼、

畜生、修羅、人間、天上）をたどつて生死をくり返す人間をさす。医師はブツダをさす。風病、胆汁性の病氣、粘液性の病氣は貪欲、憎悪、愚かさをさす。四種の薬草とは、一切のものは実体がなく（空）、一切のものは空であるから差別がなく（無相）、無相であるから願ひ求めるものがない（無願）、ということを得得し、ついに悟りの境地の入口に到達する。すなわち、空、無相、無願、悟りの入口、の四つをたとえたものである。

以上の記述から『法華経』が譬喩に富んだ經典であることがわかる。

（神奈川県予防医学協会）